それはほんの些細なきっかけ。
流しっぱなしのラジオから、曲が流れてきた、というただそれだけの。
彼女が大好きな曲だった。
そうしたら、声をききたくなった。
会いたくなった。
時計をみると、もうすぐ真夜中。
まだ、起きてるだろうか。
あの部屋に、いるのだろうか。
あの大きな執務机に向かって、作業に没頭しているのだろうか。
それとも、部屋でワイングラス片手に、夜を味わっている？

思い出してしまうと、止まらない。
気持ちが加速して、前へ前へと彼女を突き動かそうとする。
彼女の視線は、ローテーブルに置いてあるアイフォンへと向かう。
電話、してみようかな……。
手に取ると、ガラスのひんやりとした感触が伝わった。
それさえもが、彼を思い出させる材料にしかならなくて、彼女は覚悟を決めた。

「アロー？」

数回の着信音のあと、少し物憂げな声がした。
彼女はいまさらながら、緊張していた。

「あ、あの……」
「どうした？」
「あの……ユキ、だけど」

そういうと、かすかな笑い声がした。

「名乗らなくても、わかる」
「あ、そうだよね。表示されるものね」

無言。そして小さな溜息。

「で、何の用だ」

「う、うん。特に用事はないんだけど……会いたくて」

うっかりそう言ってしまい、彼女は慌てて訂正する。

「じゃなかった。声が聞きたくなって」
「へえ、オレに会いたいの」
「だから、声が」
「会いたくない？」
「……そんなわけないじゃない」

そういうと、満足そうな笑い声がする。
なんだろう、いつもと少し、違う気がするのは。
電話だからだろうか？

「もしかして、眠っていた？」

一瞬の間。そのあとに苦笑が続いた。

「ご名答」

彼女は深く後悔した。

「ご、ごめんなさい。それじゃこの辺で」
「おい」

参ったといったように、彼が言う。

「人をこんな真夜中に起こしておいて、そいつは少しつれなすぎるんじゃないか、ユキ」
「……でも、あなたの睡眠時間はとても貴重だもの」
「どちらにせよ、君が今電話を切っても、すぐには眠れやしないよ」

彼女の後悔は、深まる一方だった。

「まだ病院にいるのかと思ったの。ほんとうにごめんなさい」
「別に謝ってほしいわけじゃない」

参ったというように首を振る彼の姿が、声を通してみえるようだった。

「それより、どうかしたんだろ。言えよ」
「ううん、ほんとに用事は」
「用事じゃなくて。じゃあ訊き方を変えようか」
「ん？」
「そうだな。電話をする前、何をしていた？」
「何って……なにも。ただラジオをかけて、カフェオレを飲んでいただけだけど」
「ラジオ？」
「わりと好きで聞いてるの。いろんな音楽だったり、言葉だったりが流れてくるから。さっきもね、ちょうど私の大好きな」

そこまで言って彼女はようやく、彼の質問の意味を理解した。

「とても好きな曲が流れてきて」
「へえ？」
「でも曲名は聞かないで」
「……なんだそれは」

あっけにとられたような声がしたが、彼女は先手必勝とばかりに続けた。

「別にそういう意味はないから」
「どういう意味だよ」
「いいのわからなくて」
「ったく、なんなんだいったい」

こういうとき、電話は助かると彼女は思う。じゃないと、赤く染まった顔を、からかわれること間違いない。面と向かっては、追及を逃れる自信もなかった。

「それより、あなたは何をしていたの？」

話題を変えようとした彼女は、言ってから、自分の阿呆さ加減に気が付いた。
案の定、絶望的なため息が聞こえる。

「寝てたと、言わなかったか」
「うん。聞いた……いい夢、みてた？」

「ゆめ？」
「もしいい夢見てたのなら、今度は続きをみてね。見れるように祈っているから」
「……そうじゃなかったら？」
「悪い夢は、バクが食べてくれるよ。だから今度はいい夢がみれるわ」
「都合がいいな、君の頭は相変わらず」

からかうような声に、彼女は少しだけムキになる。

「いいの！　信じるものは救われるんだよ。なんでも疑ってかかったら、疲れちゃうもの」
「呆れるくらい楽観的だな」
「というか、怠惰なだけかな？　わたし、本当にいろいろ考えると、頭が痛くなってしまうの。だから体質っていうか」
「ずいぶんと貧弱な脳だ。今度解剖させてくれ」
「……そのときは、ついでに鍛えてもらえると助かるよ」
「何を？」
「脳」
「……おい」

信じられないといった口調だった。

「まさかとは思うが、筋肉と同じように、脳も筋トレすればいいとか考えてないだろうな」
「でも体力、……脳力、はつくよね？　基礎代謝があがるっていうか」
「そんな言葉は存在しない」

一瞬で部屋の中が冬になった。

「そうなの？」
「ああ、よくわかったよ。君の脳は貧弱というより、終わってるってことが」

終わってる……。
さすがにその言葉は、彼女にもショックだった。

「そこまで言わなくても」
「いいんじゃないか」
「なにがよ」
「終わってようが狂ってようが、いまさらどうしようもない」

「フォローになってないんだけど」
「するつもりもない」
「で、わたしを谷底へと突き落として、アナタは何がしたいの？」
「そうだな。何分で戻ってくるか、タイムでも計ってやろうか」
「もう寝る。おやすみなさい」

そういうと彼は、クスッと笑ったようだった。

「おやすみ、ユキちゃん」
「……いい夢を見てね」
「そちらこそ。いい夢を」

最後は、胸にしみいるような静かな声色だった。
たぶん夜にしか聞けない。そういう類の、声。
彼女は、通話終了ボタンを自分から押したくなくて、しばらくそのままにしていた。
けれども、相手も同じことを思っているのか、いっこうに終了表示にならない。
数分が経過すると、参ったというような声がした。

「いい加減、切ってくれないか」
「あなたこそ」
「君からかけてきたんだから、君から切るのが礼儀だろ」
「そんなの知らないよ。だってできないよ。もったいなくて」

本音が漏れる。というか、さっきから駄々漏れだけれど。

「このまま朝までこうしてろと？」
「だから、アナタが切ればいいじゃない」

数分の押し問答のあと、どちらも譲らないことが判明した。
半分は、ほとんど意地みたいにいなっている。

「ったく、強情だな。だったらいっそのこと、こっちに来いよ」

たぶんこれは、本気ではなかったのだと彼女は思う。不毛な話し合いに飽き飽きした彼の、単なる愚痴のようなものだ。けれども、それでもいいと彼女は思った。

「本当に行ってもいいの？」

　彼ははっとしたようだった。しばらく沈黙が続く。1 分にも満たない時間だったと思う。やがてあきらめにも似た声がした。

「良くない」

　そりゃ、そうだろう。

「オレが行く」
「――は？！」

　彼女は、耳を疑った。

「何を言って」
「こんな時間に、君を出歩かせるわけにいかないだろ」

　かぶせるようにそう言って、ため息が聞こえた。

「ったく、いい迷惑だ。責任はとれよ」

　そして反論の余地もなく、通話が切れた。
　液晶には、通話時間が表示されている。
　彼女はぼんやりとその画面をみつめ、何が起こったのか、頭を整理しようとしたが、無駄だった。
　これから、彼が来る？！
　ここに？！
　それは信じられないを通り越して、ありえないことだった。
　慌てて立ち上がる。
　とりあえず掃除をしなくてはと思い立ち、キッチンに立てかけてあったワイヤレスクリーナーを手にしたが、よく考えればこんな時間に音を立てるのは、近所迷惑すぎた。
　せめて片付けようと部屋を見回しても、漠然と散らかっているので、何から手をつけたらいいのかわからない。
　気ばかりが急いて、いっこうに考えがまとまらないでいる彼女の耳に、AM 放送の早口なフランス語が聞こえてきた。

　ふっと、心が軽くなる。思えば、たまたまラジオから流れてきたあの曲が、すべてのはじまりだったのだ。そう思うと、なにか不思議な気持ちがした。物事は、どう転ぶかわからない。こんなふうに、些細なきっかけが、願いをかなえてくれたりするのだから。

今夜の始まりの曲。
――Say You Love Me

でも本当は、言われるよりも、言いたいだけなのかもしれなかった。

……*Do you remember I Love You ?*